

被災者の暮らしに「収束」はない

昨年11月、福島県に入った。故郷を奪われ、家を流され、家族を失った人々が、狭い仮設住宅でひっそりと暮らしている。東電が原発から20キロ圏内の人々に支払っていた月10万円の「生活補償金」も、9月から一方的に5万円に切り下げられた。家と仕事を失った人々が、「電気代がかかるから」と暖房器具にスイッチを入れず、凍える夜を過ごしている。悲惨な原発事故を引き起こした時点で政府と東電はすでに「犯罪者」であるが、このまま被災者を放置することで、政府と東電は罪に罪を重ねている。わざと補償を遅らせることで、被災者が亡くなるのを待つ補償額を少なくしようとしているかのようだ。このまま被災者は棄てられていくのだろうか？

レポート 編集部



福島県の面積は日本で3番目

JR福島駅でレンタカーを借りて、まずは浜通りの相馬市を目指す。福島県は北海道、岩手県に次いで3番目に大きな都道府県。どこへ行くのも車がないと極めて不便だ。中通りの福島市から太平洋に面する相馬市までは阿武隈山地を乗り越えて、車を飛ばすこと1時間半。

「ぞーっとするね」
火力発電の煙突をバックに、コンクリートの基礎部分だけが残っている家、壁がはがれ落ち家具が散乱している家、家屋が流され門柱だけが残っている家…。

「気だてのいい、しっかりした子だね。料理専門学校への進学が決まっていたんだ」

レジ係の高校生が流された。コンクリートの基礎だけが残っていた



「あの日、最後まで漁協に残った職員たちが屋上に避難したのよ。でも津波はビルを乗り越えてきた。職員たちはあの柱にしがみついていた

からがら助かった。寒かったし、雪も降ったでしょ。流されなかったけど、よく凍死しなかったなーって」。

岸壁で釣りをしている人がいる。釣り竿がしなっている。大物がヒットしたようだ。体長60センチほどの立派なサケだった。「食べるの？」中島さんが釣り人に尋ねる。「うん、食べるよ。この前、測ったんだ。(放射能は)出てなかったから」

のだが、政府も東電も動かないので、しびれを切らした人々が自主測定を始めている。この素晴らしい海の幸を安心して食べることができるとか。おそらくその答えは今後何十年も「分からないまま」にされる。低線量の被曝は数年後に障害が出る場合が多い。

笹谷仮設住宅の被災者

「浪江町の川添に住んでいました。津波は大丈夫だったのですが、原発事故で避難せざるをえませんでした。3月12日の朝、パトカーがやってきて『早く避難しなさい』と叫んでいました。2〜3日で帰れると思っていたので、子どもを抱えて着の身着のまままで避難。結局そのまま帰れなくなりました」

「がんばろう福島」「負けないうべ福島」。こんな看板が目立つ福島市の街。威勢のいいかけ声で人々を励まそうとする行政。でもこの標語には心がこもっていない。本心に必要なのは、「もう一度1から始めよか！」と再起できるような具体的サポートのほすだ。

「あの日、最後まで漁協に残った職員たちが屋上に避難したのよ。でも津波はビルを乗り越えてきた。職員たちはあの柱にしがみついていた



相馬漁港のせり場。放射能がなければ再開しているはず



笹谷仮設住宅。全員が浪江町からの被災者

「3年前、2008年に思い切って建てました。半端じゃないローン払ってます。せめて家のローンはチャラにしてもらわないと。この狭

「東日本大震災と、引き続き

「原発はイヤ！だから自然エネルギー」

本誌読者5名にプレゼント

この福島ルポと環境先進国デンマークに学ぶ自然エネルギー普及への課題などをまとめた「原発はイヤ！だから自然エネルギー」が昨年12月に出版されました。藤永のふよ、西谷文和共著。

